

仕合わせの和



第181号

H. 29. 4. 1

(毎月1日発行)

命の継承

住職 谷川寛俊

自分が死んだら「お骨を海にまいてくれ」。あるいは「山に埋めてくれ」などと言う人がいます。特に著名な人や文化人と呼ばれるような人が誇らしげに語っているのを聞く事があります。そういう人は、自分は無神論者とか、無宗教論者だからとも言います。私に言わせれば、ただ単に宗教に無関心と言うだけのことだと思います。

実際、飛行機に乗って空からお骨を撒いている姿や山に埋めるところをあまり見た事はありません。確かに「樹木葬(じゅもくそう)」と申しまして、その様な墓も存在します。もし読者の皆さんだったら、どのような葬儀・納骨方法を選ばれるでしょうか？

最近私も歳のせいかわく、よく考えるようになりまして。日蓮聖人の御言葉の中に「まず臨終(りんじゅう)の事を習(な)る。うて、後(のち)に他事(たじ)を習(な)うべし」とご教

示下されています。

いずれ必然的に死を迎えます。一息一息はやがて死に向かつての一息だと思つて日々を過ごす人はあまり居ないと思つています。だからこそ、やがて迎える死というものを常に念頭に置きながら、一日一日を無駄なく大切に生きなければならぬのですよ、という教訓でもあります。

また先月号にも少し触れましたが「我が頭(こうべ)は父母の頭、我が足は父母の足、我が十指(じゅっし)は父母の十指、我が口は父母の口なり」と。自分の命は父母から頂いた命であり、父母の命もまた代々のご先祖様から頂いた命であります。つまり自分の命は、自らの命ではなく、ずっと先祖から続く命であり、この肉体なので。従つて、そう簡単に海に撒いてくれなどと言えなくなるのではないのでしょうか。

先日、サッカーの元日本代表選手でブラジルから日本に帰化したラモス瑠偉(るい)氏が、脳梗塞で倒れ懸命にリハビリに励んだ結果、見事に復帰し

「仕合わせの和」

と打ち込んで頂ければ、ホームページにつながります。

編集・発行

玉蓮山 真成 寺

編集部 谷川久仁子

TEL・FAX 0765-22-2268

携帯 080-3744-2523

こちらの番号でもお寺につながります。

た姿をテレビの記者会見で見ました。病床にある時、「僕に、もしもの時があれば、死ぬのは決して怖くないけれど、愛する妻や子供達と別れるのが辛くて……と涙声でコメントしているのを拝見し、私も感動しました。ラモス瑠偉氏の優しさが滲み出た会見だったように思います。

もつとも、ラモス瑠偉氏は、我々日本人以上に日本の伝統文化を愛し、そして連続と続く命の相続を重く受け止めている証(あかし)でもあるようにも感じられました。

このように、ご先祖様から頂戴した命は、自分一人の為のものではないのです。しかしながら、現代の家族構成を考えてみると、戦後の「生めや増やせの時代」と違って少子化となり、あと二十から三十年もすると、日本の人口が一億二千万人と言われた時代から、なんと八千万人に減少するとも言

われています。日本の人口減は致し方ないとしても、根本たる命脈は、しっかりと自覚し、そして後世に伝えていかなければならないと思えます。

